

より良い意見を構築する力を高める授業の工夫

— 相互に評価する活動を通して —

田 川 裕 之¹

今、我が国の子どもたちには、多様で変化の激しい社会を「生き抜く力」が求められている（文部科学省・第2期教育振興基本計画）。その力の一つとして「話し合う能力」に着目し、その育成を図るための授業方法について研究を行った。本研究では、中学校3年生の国語科で身に付けるべき「課題の解決に向けて話し合う能力」を「他者との合意形成を図り、より良い意見を構築する能力」と捉え、授業及び考察を行った。

はじめに

私は、これまで、学習の主体者としての生徒が「自らの意見を持つ」ということを大切に授業を行ってきた。ただ、それは物語の主題や説明文の論旨をまとめた上で意見を述べる等、「読むこと」領域での指導に偏っており、「話すこと・聞くこと」領域での指導は不十分であった。

具体的に言えば「話し合いの方法」についての丁寧な指導が欠けており、よって、話し合い活動が十分にできていないことが本校の生徒の課題となっている。生徒の実態として、日常生活における親しい仲間同士での会話は容易にできるが、授業等において建設的な話し合いが成立しにくいという点がある。また、他者の意見を批判的に捉えることに躊躇する傾向もあるため、意見に対して自分の感想を述べる程度で話し合いが終わってしまうという点も挙げられる。そこで、本研究では意見の交流を通して互いの考えをいかし合い、自らの考えを深め広げ、集団としてのより良い意見を構築する力を高めるための授業の在り方を探りたいと考えた。

研究の内容

1 テーマ設定の理由

平成20年の中央教育審議会答申における、学習指導要領改訂の基本的な考え方の一つに「思考力・判断力・表現力等の育成」があり、そのためには「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」学習活動が重要であるとされている。

前述の通り、本校の生徒には集団での話し合いを苦手としている実態がある。他者と、より有効な交流を図り、一人ひとりの異なる考えを受け止め、いかし合う力を身に付けさせたい。そこで、本研究では、生徒が「話し合う能力」を高めるための「話し合いの方法」の指導を見直すこととした。

話し合いの方法の指導は、国語科の「話すこと・聞くこと」領域で行う。中学校学習指導要領（文部科学省2008）によれば「話し合う能力」に関する各学年の目標は、第1学年で「話題や方向をとらえて話し合う能力」、第2学年で「相手の立場を尊重して話し合う能力」、そして第3学年ではそれらを経て「課題の解決に向けて話し合う能力」を身に付けることとなっている。本研究は、中学校第3学年を対象とした。第3学年で求められる「課題の解決に向けて話し合う能力」とは、中学校学習指導要領解説国語編（文部科学省2008 以下、学習指導要領解説）では「立場や考えの違いを認めつつ、課題の解決に向けて自他の考えを整理し、合意形成を目指して話し合う能力のこと」とされている。本研究では、この記述に基づき「課題の解決に向けて話し合う能力」を「他者との合意形成を図り、より良い意見を構築する能力」と捉えた。

話し合いによって「より良い意見」を築き上げるためには、互いの考えの共通点と相違点を精査し、一人ひとりの意見を集団の意見として再構築する必要がある。誰かの考えに安易に迎合するのではなく、課題の解決のために、一人ひとりの異なる考えをいかし合いながら、互いが理解し納得した上での意見構築を目指して話し合う。こうした合意形成を図る過程で生まれた意見を「より良い意見」と考えた。

さらに、その学習過程の中に生徒が自らの話し合いを客観的に捉えられるよう、互いの意見を「相互に評価する活動」を取り入れることとした。ここでの「相互評価」とは、他者の意見を批判的に捉えることによって生徒が自分たちの話し合いの在り方を分析することである。そうした学習活動の場を設けることは、生徒が自分たちの話し合いを対象として客観的に認識すること、いわゆる「メタ認知」の機会となる。それが、より良い意見を構築するための「話し合いの方法」を身に付けること、集団で話し合うことの意義を実感させることにもつながると考える。

1 横須賀市立衣笠中学校

研究分野（授業改善推進研究 国語）

2 生徒の実態と課題の把握

研究を進めるにあたり、本校の生徒の実態をアンケ

ートにより調査した。対象は第3学年171名である。「話し合い活動が好きですか」という質問に対して「好きだ」「どちらかというと好きだ」と回答した生徒は合わせて約60%であった。「好き」な理由として圧倒的に多かったのは「仲間の意見を聞くことで、考えが広がったり深まったりする」ということであった。一方、話し合い活動が「好きではない」「どちらかというと好きではない」と回答した約40%の生徒は、その理由として「自分の意見がまとまらない・出せない」ということを最も多く挙げていた。また、話し合い活動の好き嫌いによらず、話し合いの際に自分の意見をどれだけ持って参加しているかということを見ると、約56%の生徒が「自分の意見を持っていない」状況であった。

生徒は他者の意見を聞くことは、役立つから「好き」であり大切であると考えている。しかし、同時に多くの生徒が自分の意見を出すことが難しいと感じている。自分で考えをまとめきれないために、他者の意見に引きずられてしまったり、はじめから自分ではほとんど考えないという状態で話し合いに臨んだりしているのである。また、意見を持っている生徒であっても「自分の意見に自信がない」という回答が目立った。これらの結果から、本校の生徒の話し合いは、「話し合う」というよりも、むしろ意見を「聞き合う」ことにとどまっているのではないかと考えた。

これらの調査結果及びこれまでの授業実践から、生徒の課題を整理した。

- ・自分の意見をまとめきれない。
- ・自分の意見に自信が持てず、周囲に伝えられない。
- ・話し合いが人間関係に左右され、集団の意見として成立しにくい。
- ・他者の意見を「批評」する方法が分かっていない。

これらの課題を解決するため、以下の四つの方策を立てた。

3 課題解決のための方策

(1) 個人のアイデアを出しやすくする。

話し合いが成立するためには、与えられたテーマに対し、自分はどのように考えているのかを示すことが基本であるが、前述の通り、生徒は自分の意見を出すことに難しさを感じている。そこで、アンケートの中の「自分の意見がまとめられない」という回答に着目した。生徒には、意見を「自分で」まとめなければならないという意識があり、それがすなわち「良い意見を出すこと」であると考えている。そのような思い込みが、彼らにとって高い壁となり、自分の考えを出しにくくしていると考えた。意見をまとめ、より良くしていくことはグループで行うべきことであり、はじめから「完成した意見」を出す必要はない。話し合いの基本材料となる「アイデア」を出すことが大切である。まずは、質よりも量を重視すべきであることを実感するための

学習活動を設定することが有効であると考えた。（方策A）

(2) コンセプトを意識させることにより、合意形成をしやすくする。

話し合いを始める段階では、一人ひとりのアイデアは当然のことながら多種多様な内容となっている。そのばらばらの状態から、限られた時間の中で合意形成を行うことは、話し合いに慣れていない生徒にとっては極めて困難なことである。

そこで、話し合いの早い段階でコンセプトを決める場面を設定し、話し合いの「方向性」を意識させた。話し合いの方向性が定まることで、多種多様な材料をある程度絞り込むことができる。それにより話し合いが拡散することを防ぎ、合意形成がしやすくなると考えた。（方策B）

(3) アイデアそのものを整理することにより、話し合いをまとめやすくする。

これまでの話し合いでは、発言力のある生徒が強引に自らの意見を通したり、「この人が言ったから」と周囲の生徒が妥協したりと、意見の内容よりも人間関係に左右されてしまうことが多かった。アイデアそのものの内容や特徴を分析し整理するという活動を取り入れることにより、本質的な合意形成に近づき、人間関係と切り離された話し合いを行うことができると考えた。（方策C）

(4) 活動を客観的に見直すことにより、話し合いの方法を学びやすくする。

話し合いの方法を身に付けるための指導が不十分であった結果、生徒は話し合いの時間を漫然とした「おしゃべりの時間」として過ごすことが多かった。また、より良い話し合いの方法が分からないため、その状況を改善しようという意識も持ちにくかった。そこで、他者からの視点を取り入れることで、自分たちの話し合いを客観的に見直し、話し合いの方法に着目できるようにした。それにより、生徒が話し合うことの意義を理解し、その方法が学びやすくなると考えた。（方策D）

以下、これらの方策に基づいた授業の展開及び考察である。

4 授業の展開

(1) 概要

【実施期間】平成26年11月17日（火）～25日（火）

【対象】所属校第3学年2組・4組

【単元名】課題解決のための話し合い方を学ぼう

【単元目標】

話し合いが充実するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えをいかし合うことで話し合う力を高め、意見を構築する力を養う。

【評価規準】

・社会生活の中的话题について関心を持ち、課題の解

決に向けて積極的に話し合い、互いの意見や考えを
いかそうとしている。(国語への関心・意欲・態度)
・課題の解決に向けて、より多くの発言を求めたり、
意見の調整の仕方を提案するなど、話し合いの進行の
仕方を工夫して話し合っている。(話す・聞く能力)
・話し合いが充実するように、語句の読み方や意味、使
い方などに注意しながらテーマに関する資料を読ん
でいる。(言語についての知識・理解・技能)

(2) 展開

単元を四つのまとまりに分け、全体を構成した。

第1次：学習の見通しを立てる
第2次：話し合いのテーマを理解する
第3次：話し合って意見を構築する
第4次：学習活動を振り返る

第1次：学習の見通しを立てる

①学習目標と流れを理解する

「学習の見通し」とは、活動のスケジュールを知る
ことだけではなく、何を何のためにどのように学ぶの
かを知ることである。生徒には、教員用の学習指導案
を再構成した本単元の学習計画表を配付した。そこには
単元目標、評価規準、活動内容、学習のポイント、
評価方法を明示した。

②現時点での話し合う力を確認する

身近な言葉の定義付けを話し合いによって行った。話
合い方を示さずに話し合わせるにより、現時点での
話し合う力を確認させ、合意形成の難しさを実感さ
せることをねらいとした。生徒は、この作業を踏まえ
て「合意形成」という言葉とその意味を理解した。

③話し合い活動のルールを自分たちで設定する

話し合いをする上で必要なことを、自分たちでルール
として設定した。生徒が自分で考え、更に学級で共有
することにより、話し合いのルールを自分たちのことと
して捉え、話し合いの方法を学ぶことの意義を理解させ
ることをねらいとした。

さらに、共有したルールの中から個人的に重視した
いことを一つ選ばせて、「話し合う力を付けるための
自己目標」として設定させた。(方策D)

第2次：話し合いのテーマを理解する

ここでは、これから行う話し合いのテーマの内容の理
解を目指した。テーマは、「より良い意見を構築する
力を養う」という単元目標を踏まえ、一つの結論が想
定されるものではなく、生徒がアイデアを出し合って、
企画を工夫しやすいものとした。

本単元では、「海外からの留学生への横須賀市の案
内・紹介」「学校で取り組む地域貢献活動」「小学生
への学校紹介」の三種類を準備し、学級ごとに一つの
テーマを提示した。

また、テーマに関する新聞記事やインターネットの
記事等を配付し、自分のアイデアを考え出すヒントと
なるようにした。

第3次：話し合って意見を構築する

①自分の考えを持つ

案を立てる上での基本となるアイデアを、付箋紙に
書き出した。この作業は、話し合いを行うにあたり、ア
イデアをできるだけ多く出すことが大切であることに
気付かせるために行った。(方策A)

②グループのコンセプトを設定する

アイデアの書かれた付箋紙を内容や視点等に沿って
分類し、その中からグループの話し合いの核となり得る
ものを選んだ。選んだものをグループの「コンセプト」
として設定した。(方策B)

③コンセプトに基づいたアイデアを分析・整理する

座標軸を用いてアイデアを分析・整理した。座標軸
はテーマによって変わるが、本単元の場合、話し合いの
テーマが企画を立てていく内容であるので、縦軸には
効果の多寡、横軸に実行のしやすさを設定した。整理
したアイデアを組み合わせ、具体案としてまとめてい
き、第一次案とした。(方策C)

④相互に評価する

ここまで行ってきた自分たちの話し合い活動を客観的
に見直すため、相互評価を行った。自分たちのグルー
プの案を第三者に説明することを通し、話し合いの経過
を振り返るとともに、他のグループからの評価により、
別な視点から自分たちの話し合いを見直した。相互評価
活動は、複数のグループから評価を得られるように、
グループを替えて二度行った。(方策D)

相互評価を経た後、その内容をいかしながらグルー
プとしての最終案をまとめる作業を行った。

⑤学級全体で意見を共有する

グループごとにどのような最終案になったのかを、
学級全体で共有した。その際に、第4次に行う話し合
い活動の振り返りにつなげるため、「どのような点を工
夫したのか」「苦労したことは何か」など案の内容だ
けでなく、意見を構築するまでの話し合い活動の過程に
ついて、グループで一人ずつ発表させた。

第4次：学習活動を振り返る

第1次で設定した自己目標がどの程度実現できたの
かを分析させた。それを受けた振り返りは、話し合いの
意義を理解し、自分たちの話し合いをより客観的に捉え
ることを目的に行った。個人で考えてから、グルー
プごとに集まって話し合うようにした。(方策D)

(3) 評価の方法

ア 話す・聞く能力

話し合いの進め方を工夫し、課題の解決に向けて互
いの考えをいかし合っているかを、話し合い活動の行動観
察と、第3次でのワークシートの記述内容から分析し
た。

グループ内で出したアイデアの有効性を話し合っ
て整理したり、相互評価活動によって受けた助言をい
かしながらグループ案をより良いものにしたりしている

生徒を「おおむね満足できる」状況と評価した。

イ 国語への関心・意欲・態度

自分たちの話し合いを客観的に捉え、話し合いの意義を理解できているかを、第4次での学習の振り返りのワークシートの記述内容から分析した。

より良い話し合いの方法を考え、本単元を通して身に付けた力のいかし方を理解している生徒を「おおむね満足できる状況」と評価した。

ウ 言語についての知識・理解・技能

語句の読み方や意味・使い方などに注意しながら、話し合いのテーマに関する資料の内容を読んでいる生徒を「おおむね満足できる」状況と評価した。

5 授業の考察

先に立てた「課題解決のための方策」を中心に授業を分析した。

(1) 個人のアイデアを出しやすくする。

自分の意見を出すことが困難である生徒に対して、自分の中で意見をまとめることよりも、まずは数多く出すことを優先させる指導を行った。生徒は周りの目を気にして「良いアイデア」を出そうとする。しかし、話し合いの基本材料となるアイデアは「質より量」が重要である。思いついた内容を付箋紙に書き出し、次々に貼っていくことにより、「誰が考えたか」ということよりもアイデアそのものに注目できるようになった。また、書くという行為を通して自分の考えを整理することができた。付箋紙が貼られた状態で残っていることは、一人ひとりのアイデアが大切にされているという感覚を得ることを可能にし、生徒一人ひとりにアイデアを数多く出そうとする意欲を持たせることにつながった。

なお、話し合いのテーマについては、中学生が身近な話題として捉えつつ、アイデアを出し合って企画を工夫しやすいものを提示した。話し合いの目的が「話し合いの充実」にあるならば、テーマは生徒自身の課題意識に基づき、切実感を持って臨めるものであることが望ましい。しかし、今回の目的は「話し合いの方法を学ぶこと」である。そこで、生徒個々の興味・関心からある程度距離を置きながら、話し合いの方法の良さ悪しを意識しやすいテーマをあえて教員側から提示した。

(2) コンセプトを意識させることにより、合意形成をしやすくする。

第3次で、アイデアを出す際にまず出てきたアイデアからグループとしての基本コンセプトを設定させ、さらに、そのコンセプトに基づいてアイデアを追加させた。コンセプト設定後に追加されたアイデアの方が方向性が同じであるため、グループ内での合意が得られやすかったようである。

このことから、グループの話し合いの方向性を「コンセプト」として定めることが、合意形成を図る上で有

効であることが分かった。ただ、コンセプト形成の指導法に関しては、改善の余地があった。合意形成をするためには、適切なコンセプトの設定が不可欠だが、生徒はコンセプトとは何か、どのようなものが良いコンセプトなのかということが分かっていなかった。本単元では、自分たちのアイデアを分類し、その中からコンセプトを選択させた。しかし、そのコンセプトが曖昧なケースが多く見られた。選択させること自体はコンセプト形成のきっかけにはなったが、それだけでは不十分であった。

(3) アイデアそのものを整理することにより、案をまとめやすくする。

第1次では、まず話し合いの方法をあえて示さずに現時点での自分たちの話し合う力を確認したのだが、話し合いが人間関係に左右されてしまうという生徒の実態が改めて明らかになった。この時、話し合いは一見円滑に進んでいたように見えた。しかし、これは合意形成がなされたわけではなく、個人の見解をグループ内で議論せず、発言力のある生徒の意見に迎合してしまったことによるものと推察される。

第3次の段階では、このような実態に対し、人間関係と切り離されたグループ案のまとめが行えるように、アイデアそのものを整理する方法をとった。座標軸を用い、その位置関係から、アイデアの性格が整理されたため、グループ案をまとめやすくなった。座標軸上での付箋紙を用いたアイデアの分析は、「誰が考えたアイデアか」という考えにとらわれにくくなる。そのため、アイデアの内容のみで検討がなされ、人間関係に左右されない本質的な合意形成に近づくことができた。

(4) 自分たちの話し合いを客観的に見直し、その方法を学びやすくする。

本単元では、生徒自身に目標を設定させ、グループ同士の相互評価活動を取り入れることによって、自分たちの話し合いの方法を分析することを目指した。生徒は、賛成・反対・疑問・助言といった視点による他者からの評価を基に、自分たちの話し合いを客観的に見直し、意見を再構築した。

事後アンケート調査での「他の班の意見に対して評価をすることができましたか」という質問に対して約97%の生徒が「できた」と回答し、「もらった評価は、班の意見をより良くするためにいかすことができましたか」という質問に対しては約94%の生徒が「よくできた」「どちらかと言えばできた」と回答していた。

他者から客観的な視点を取り入れることに関しても、「他の班（人）を評価したり、逆にしてもらったりすることに関してどう思うか」という質問に対して「アドバイスによって新しい発見がある」「良い点や悪い点は、客観的に見ないと分からないこともあるので良いと思う」という肯定的な回答をした生徒が合わ

せて約70%であった。このことから、多くの生徒が、他者からの客観的な視点によってより良い意見を構築することができ、話し合うことの意義を理解し、その方法を学ぼうとする意欲を高めることができたと考えられる。

ただ、他者からの客観的な視点を取り入れることが有効であることが分かっているにもかかわらず、困っている状況の生徒もいた。本単元では、アドバイスをいかす指示はしたが、これに加えてアドバイスのいかし方についての指導を行う必要もあったと考える。

6 成果と課題

(1) 成果

ア 話し合いの方法を学んでいるということを主体的に意識することにより、より良い話し合いを行おうという生徒の意欲が高まった。

生徒自身が、これまでの話し合いの経験における課題点を整理し、その解決策を考えることを通じて、話し合いの「方法」を学んでいるという意識を高めることをねらいとした。具体的には話し合い活動をうまく進めるために必要なことを、教員側から示すのではなく、生徒自身に考えさせ、さらに自己目標として設定させた。

その結果、話し方や進行の仕方、合意形成するために必要なことなどを主体的に意識することができ、話し合いの内容ではなく、話し合いの「方法」への意識を高めることができた。

イ 個人のアイデアを出しやすくすることにより、話し合いが活性化した。

本単元では、話し合いの基本材料となるアイデアを出す際に、付箋紙を活用した。これは、話すよりも書く方がアイデアを出しやすく、かつ「誰のアイデアか」ということにとらわれることなくアイデアそのものに意識を向けやすくなるからである。

事後アンケート調査での「自分のアイデアを出すことができましたか」という質問に対して約92%の生徒が「アイデアを出すことができた」と答えた。その理由としては、「付箋紙を使ったためアイデアを出しやすかったから」という内容が約87%であった。また、話し合いの内容については、約83%の生徒が「皆で意見を出して話し合えた」ことを理由に「班の全員が納得できる意見を構築することができた」と答えた。

人間関係を意識せずにアイデアを数多く出すことで話し合いが活性化することに、多くの生徒が気付いたと言えるだろう。

ウ 相互に評価する活動を取り入れることにより、互いの考えをいかし合い、より良い意見を構築することにつながった。

自分たちの話し合いを分析することを目的に、相互に評価する活動を取り入れた。その結果、前述の通り、

生徒が自分たちの話し合いを客観的に見直すことができ、グループ内の合意形成を図る上で有効であった。

エ 自分たちの話し合いを見直すことにより、より良い話し合いの方法に気付くことができた。

自分たちの話し合いに対する考えが、本単元を通してどう変化したのかについて客観的な見直しを行わせた。単元の初めと終わりで「より良い話し合いのために必要なことは何か」という質問をした。

【より良い話し合いのために必要なことは何か】

(生徒の主な回答)

<単元の初め>

- ・相手が話すときは目を見て話すこと
- ・役割分担をしっかりとすること
- ・司会者の雰囲気づくり

<単元の終わり>

- ・全員ができる限り多くの意見を出すこと
- ・他の人の意見も取り入れること
- ・個人の意見のメリットとデメリットを考えること

単元の初めの段階では、話し合う際の所作や態度、雰囲気づくりなどが主な回答であったのが、単元の終わりの段階では、数多くのアイデアを出すことや他者の考えも取り入れること、意見そのものの内容を検討することなど、合意形成のためのより良い話し合いの在り方について質的な高まりが見られた。

オ 話し合うことの意義を理解することにより、生活の中での話し合いの在り方考えることができた。

第4次で、話し合うことの意義を確認した。話し合うことの難しさを感じながらも、個人で考えることとの違いと重要性を理解できていた。

【個人で考えることと集団で話し合うことの違い】

(生徒の主な回答)

- ・集団で話し合うと考えが深まる
- ・予想外の意見が出て考えが広がる
- ・集団の方が、意見がより良くなる
- ・集団だと意見をまとめるのが大変

話し合う能力のいかし方についても、国語科以外の各教科の学習や将来に結びつけて考えることができていた。

【身に付けた力をどんな場面でどういかしたいか】

(生徒の主な回答)

- ・あらゆる場面の話し合いにいかしたい
- ・国語以外の班活動でも平和に話し合いたい
- ・将来、社会に出て会議などが行われたときに、今回の話し合い活動の経験をいかしていきたい

(2) 課題

ア グループの話し合いの方向性を定めることの重要性とその考え方についての指導

グループとしての話し合いの方向性を定める指示をする際に、「コンセプト」という言葉を用いた。しかし、「コンセプト」が何であるかということの捉え方に差

が生じてしまった。言葉の意味の説明は行ったが、コンセプトの決め方の指導については十分とは言えなかった。生徒は、直接に具体で物事を考えていくことには慣れているが、抽象から具体を生み出していくという作業には慣れていない。本単元の事例で言えば「横須賀の名所と名物を楽しみ、日本の文化を体験する」や「地域の人を元気づける」など、まず、核となる方向性を定めることが、合意形成をしやすくするということを理解させたい。そのためには、コンセプトの捉え方とその設定方法について、効果的な指導方法を研究する必要がある。

イ アドバイスのいかし方への手立て

グループ内で合意形成をすることに関しては、多くのグループがおおむねできていた。これは、意見構築までの細かな段階を踏んだ手立てを講じた結果と考えられる。しかし、他のグループとの相互評価活動の段階では、もらったアドバイスに納得していないにもかかわらず、グループ案を変更してしまったところがあった。変更をする際に「こういうことを言われたけれど、自分たちは納得できていない。どうしたらいいのか」と質問をしてきた生徒も多くいた。先に本校の生徒の課題として「他者の意見を『批評』する方法が分かっていない」ことを挙げたが、同時に「批評のされ方」も分かっていないと言える。

また、相互評価活動は付箋紙のやり取りではなく口頭によるものなので、人間関係を気にする意識が再び生まれてしまったことも戸惑いの一因であろう。授業では、相互評価によってももらったアドバイスをいかすという指示しかしていない。アドバイスの取捨選択を含めた折り合いの付け方についての指導を、時間をかけて行う必要がある。

ウ 系統性を持った「話し合う能力」の育成の在り方

本研究では、中学校3年生を対象として授業と考察を行った。今回の短期間での授業でも、実践を通して生徒が「話し合いの方法を学ぶこと」の重要性を認識することができた。だが、「話し合う能力」は一朝一夕に育まれるものではない。その基礎には「話す」「聞く」各々の能力の育成が必要である。加えて、その前提となる小学校における指導とのつながりを意識することも不可欠である。

改めて、中学校3年間の、ひいては義務教育9年間の系統性を持った領域の指導の必要性を感じるようになった。

エ 各教科の言語活動の充実につながる言語能力の育成の在り方

国語科の授業においては、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」といった言語能力そのものの育成が求められている。各教科の授業においては、国語科の授業で培った能力を活用して、教科のねらいに即した言語活動を行うことが重要である。この

二つがバランスよく行われることが言語能力を更に向上させていくことにつながるのである。

国語科と他教科との連携の在り方については、今後とも探求すべき課題である。

おわりに

私の授業実践上の課題は「話すこと・聞くこと」領域、とりわけ「話し合う能力」に関する指導の不足であった。当然のごとく、生徒もその力を十分に身に付けているとは言い難かった。本校の教員からのアンケート調査結果を見ても、大半の教員が国語科の授業で「話し合う能力」を身に付けておいてほしいと考えていた。

話し合い活動は、学習指導要領解説によれば「それぞれの生徒が話し手でもあり聞き手でもある言語活動であり、また、話すことと聞くことが同時に展開する言語活動でもある」とされている。「話す能力」及び「聞く能力」が培われていなければ、「話し合う能力」を高めることは難しい。話し合っている中で身に付けるものもあるかもしれないが、今後は「話す能力」及び「聞く能力」を育む授業を根本から見直し、「話し合う能力」を高めるための基礎となり、各教科での学習に資するものとなるような学習の在り方を研究していきたい。

本研究を進めるにあたり、多忙な中、御協力いただいた横須賀市立衣笠中学校の先生方に深く感謝申し上げます、結びとしたい。

参考文献

- 文部科学省 2013 「第2期教育振興基本計画」
- 文部科学省 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社
- 国立教育政策研究所 2011 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 国語）』
- 釘山健一 2008 『「会議ファシリテーション」の基本がイチから身につく本』すばる舎
- 田中洋一 2009 『中学校国語科 国語力を高める言語活動の新展開「話すこと・聞くこと」編』東洋館出版社
- 宮内泰介 2013 『グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング』三省堂
- 村松賢一 2001 『21世紀型授業づくり17 対話能力を育む話すこと・聞くことの学習-理論と実践-』明治図書出版